

日中学院校友会企画・第6回特別企画中国旅行

長江クルーズ・歴史の旅

長谷川 良一

日中学院校友会主催の中国旅行は今年で6回目であり、今までの5回は、全て4泊5日の旅であった。これが限界だと思っていたので、日にちのかかる「三峡の旅」は、始めからスケジュールには入らなかった。ところが昨年の蘇州の旅の中での雑談で、交渉ワールドの松田さんから4泊5日でも可能だと聞いたので、早速皆さんの反応を聞いてみたが、希望者がかなりあって、旅の最後にとったアンケートでも、希望が一番多かった。それで今年は「三峡の旅」に決めたのであるが、よく聞けば、4泊5日では重慶・武漢は素通りだということだった。重慶は「三峡の旅」以外には訪れるることは殆ど無く、素通りするにはあまりにも残念なので、重慶・武漢をそれぞれ1日入れてもらって、特別企画として今回のような6泊7日の日程となったのである。費用も今まで13万5千円で一貫していたが、それではまかないきれず、20万2千円にふくれ上がってしまった。人数が集まれば「長江クルーズ」の遊覧船は、最高の五つ星級・定員150名の豪華船をチャーター出来るということだったので、満員とはいかないものの、せめて定員の半分の75名位は参加してもらいたいものと、企画者の間では話し合っていたが、始めはその実現には全然自身が持てなかつた。ところが企画者の熱意を皆さんが汲んでくださったのか、15名、8名、7名のグループ参加もあって、結果として、思いがけずも75名の参加目標を達成することができたのである。ただ、後で述べるように、そのうたい文句であった「豪華チャーター船による長江クルーズ」がおかしなことになってしまい、企画者一同としては、参加者の皆さんに、本当に申し訳なく思っている。

一口で言って今回の旅行はハプニングの連続であった。今までの5回が、すべての予定

日程を無理なくこなし、私があらかじめ予想したとおり、時には私の予想していた以上の素晴らしい旅に終始していたので、今回は全く面食らってしまった。まず、上海では重慶行きの飛行機の出発が遅れたうえ、まもなく目的地に到着しようとした頃、空港が霧で閉鎖されているので成都に着陸するとのアナウンスがあった。若しそうなると重慶の見学がすべてパーになるばかりか、当夜の乗船も危ぶまれることになる。これが最初のハプニングであった。幸いその後、空港の閉鎖が解かれたので、昼過ぎにはどうやら重慶空港に降りることが出来たが、重慶見学のハイライトであった郊外にある紅岩革命記念館・中美合作所の見学は、時間上割愛せざるを得なくなり、桂園（張治中の屋敷、毛沢東が延安から自ら赴いて、国民党との間で抗戦勝利後の中国の進路について談判した舞台）、重慶市博物館（恐竜の化石、かなりの数にのぼる素晴らしい東漢の画像石および石刻を収蔵するが、展示は旧態依然とした薄暗い照明で、後で述べるが湖北省博物館新館のような近代的な照明に変れば展示品の価値が何十倍も映えることだろうと惜しまれた）、それと枇杷山山頂からの重慶展望の三ヶ所だけに終わってしまった。しかし、これは天候による不可抗力な結果であり、昼過ぎになったとはいえ、成都ではなく重慶に降りられたことは、儲け物と云わざるをえず、団員の皆さんも寛恕してくださることだろう。

問題は「長江クルーズ」のチャーターであった。五つ星の豪華観光船・神州号に乗船してすぐに、幾つかのグループ・総計20名以上の他の団体の乗客が同船していることが判明したのである。これでは「チャーター」をうたい文句にしてきた看板に偽りがあり、校友会の信用にもかかわると考えたので、久保副

会長・和泉理事との相談の結果、既成事実はどうしようもないにせよ、せめて名目上だけでも我々の団を優先し、校友会の面目を立てほしいと、日中双方の旅行社に要求することに決めた。ところが夜11時を過ぎて第2のハプニングが起きたのである。長江の異常渇水のため、奉節まで下るある浅瀬で、神州号では20センチあまり船底が深すぎて通れず、とりあえずそれより小型船の巴山号に乗り換えて浅瀬を通過し、さらに奉節で待っている五つ星の藍鯨号に乗り換えなければならぬという。では、乗り換える時期を何時にするのか？3日間船の生活を予定している団員は、ほとんど荷物を解き、すでに眠りについているに違いない。今夜の乗り換えは無理だ、明朝にしよう。しかしそうなると日程上、その後の日程を割愛せねばならなくなる。いま団員をたたき起こして日程を出来るだけこなしたほうが良いのか、乗り換えを明朝までのばして、止むを得ず日程を割愛したほうが、団員によろこばれるのか？校友会では議論を重ねた結果、最終的には即時乗り換えを決定、時間的に十分余裕を持たせて午前1時に巴山号に乗り換えることに決めた。その間団員の皆さんには多大のご迷惑をかけたことを改めて深くお詫び申し上げる。その後、校友会では「チャーター」の原則を貫くために、日中双方の旅行社に、奉節での乗り換えに際しては藍鯨号には我々の団だけが移り、その他の乗客はそのまま巴山号で旅を続ける事を提案したが、既に巴山号で出発する予定であった百数十名の乗客を重慶に待たしてあるということで、それも実現しなかった。既に出来上がっている現実を変更させることは、きわめて難しい事である。これは私にも判っていた。それがどうすることも出来ない事であれば有るほど、校友会のうたい文句の面目にかけて、せめて名目だけでも「チャーター」の原則は貫きたかった。それが出来れば団員の皆さんには申し訳が立つ。ところが藍鯨号に移った後の最初の船内アナウンスを聞いて私は愕然とした。まず中国語、次に英語で日本語がな

いのである、このアナウンスは、我々の団の船内における位置が船の主賓でないばかりか、乗客の数の中にも入っていないことを象徴していたのである。私は早速、日中双方の旅行社に厳重に抗議し、既成事実は仕方がないにしても、名目だけでも原則を貫くよう要求した。その結果、その後の船内アナウンスは、まず第一に日本語ということが実現した。「チャーター」の件については、団員の皆さんのが現実に体験された通りであり、言い訳は申し上げないが、校友会としては、その改善のため出来るだけの努力は尽くしたということだけは知って頂きたい。

長江の異常渇水は、見学スケジュールにも影響した。予定していた張飛廟には上陸できず、船上からしか望めなかった。その代わりとなった石宝寨は、NHKのBSの放映をすでに見ているものには（私も含めて）その内部の様子を知っていたが、彩石が出ることで「石宝」と名付けられたという由来を知ったことは収穫だった。それと、その山に五団の全員があの建物内部の木造の急な階段を登り切ったことは驚きだったし、その元気には感心した。スケジュールの変更から、旅行社側では白帝城の見学を日が暮れてからと予定していたが、校友会側では暗やみでは見学する意味がないと断固反対し、翌朝夜が明けてからにしてもらうことにした。その時間の織寄せで、小三峡ではハイライトの一つであった明清の町並みの残る大昌鎮には行けなかった。暗やみのなかでの白帝城見学よりはよかたと校友会では考えているが、果たして団員の皆さんはどうだっただろうか。また、小三峡からの戻りが遅くなつたため、巫峡のハイライトだった神女峰通過が夕闇のなかで、多くの団員がその姿を確認出来なかつたようである。（実は私も藍鯨号には船内の展望室がなく、最上甲板でしか見られなかつたので、風邪を恐れて早々に自室に引き上げ、神女峰通過の中国語船内アナウンスで窓外に目を凝らしたが、すでにBS放送でその形状を知っていたにもかかわらず、第3回目の三峡下りで

も、またもやその姿を確認することが出来なかつた) このようにこの度の旅行のハイライトであった三峡下りではいろいろと残念なことがあったが、そのことを割り引いても、皆の者にはこの目でその雄大な景色に接し、またダム完成後の姿を想像して、感動一入のものがあったと思う。わたし自身も小三峡で絶壁の風箱(古代人の棺桶)をはっきりと確認したときは感動一入であった。

また長江の異常湯水はすべて悪いことだけではなかつた。82年8月の私の2回目の三峡下りでは、上流の乱伐によって、長江の水は黄河とはまったく区別のつかない濃いココア色であったが、今回は支流の土砂が流れこんでいなかつたため、本来の長江での水の色をとりもどしていた。(増水期になれば、またもとのココア色になるであろうが) これは貴重な体験であった。

巴山号では団員のために謝貴安武漢大学副教授による三国志講義、重慶市の太極拳名師楊先生の24式の講習、私の「中国節約一人旅こぼれ話」が行われた。気の毒だったのは、ぶっつけ本番で三国志講義の通訳をさせられた重慶のガイドであった。前もって原稿も見せられなければ、良い通訳が出来るはずもない。本人にも気の毒であったし、受講者の皆さんも話の内容のかなりの部分を理解できなかつたに違いない。これは今後気をつけなければならぬことである。

「長江クルーズ」は宜昌で下船ということで、私はてっきり葛洲ダムを通過してからかと思っていたが、その手前の三遊洞のそばの下船だった。私個人としては三国志の物語にはあまり興味がないので、実は、その関係箇所は団員の皆さんに御供しての通り一遍の見学だった。しかしその反面、その豊富な収蔵品のほんの一部しか見学できなかつたが、保存状態のきわめて良い男性ミイラ(長沙博物館の女性ミイラは、76年12月見学したときは保存状態が素晴らしかつたが、83年8月にはかなり萎びており、三国志の講座講師・謝副教授が84年に見学したときは既に黒くな

っていたという)を収蔵する荊州博物館、それに79年2月・86年12月の2回見学したことのある、曾侯乙墓の出土品を展示する武漢博物館新館は、私にとっては素晴らしいものであつた。とくに武漢のそれは、前の2回の旧態依然とした薄暗い照明のなかで見たのと違ひ、近代的な照明の下で、その出土品の全容を始めてみる思いだった。団員の中にも武漢を中心にもう一度訪れてみたいという声が上がつたが、それほどまでに新館の展示は素晴らしかつたのであろう(それにガイドの詳しい説明も展示品の理解を深めたようである)。

宜昌から武漢へのバスも御難続きであった。すり減ったタイヤをつけた1台のバスが、最初にパンク、次に高速道路に乗る前の整備点検、高速道路を降りてからの再びのパンクで、べらぼうに時間を食い、夜も更けたので体の調子の悪い人を別の1台のバスにのせて30分ばかり前に先行させ、後の修理を終えたあのバスが武漢のホテルに着いたときには午前1時に近かつた。少しでも団員の皆さんに休養を取ってもらおうと、翌朝の起床時間を予定より遅らせることにしたが、それが結果として良かったのか、その翌日ホテルに残つた人は、予想に反してたつた一人、我々三人校友会関係者はほつとした。そのため見学を予定していた帰元禅寺は割愛せざるをえなかつたが、肝腎の五百羅漢は修理中ということだから許されることだろう。

旅の楽しみの一つは食べることであるが、今回は昨年の蘇州旅行ほどには素晴らしいくなかった。特に私が推薦した上海の綠波廊の料理はひどいものだった。団員の皆さんに心からお詫び申し上げる。ただ、旅の所どころで地方の素朴な田舎料理が味わえたことは、唯一の救いであった。そのなかで四川の風味である「粉蒸肉」「真珠丸子」が味わえたし、藍鯨号の食事では武漢の風味である「豆皮」、それに毛沢東の詞にも出てくる武昌魚を賞味することが出来た。お土産には私推薦の湖北特産「孝感麻糖」を、多くの団員が購入され

たが、果たしてその味はお気に召すものであつただろうか。

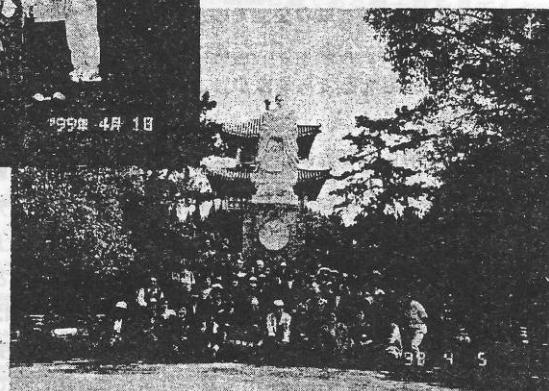
いろいろとハプニングとトラブルがあつたが、ともかくにも無事に旅行を終えることが出来たのは、ひとえに団員の皆さんのお協力のおかげであり、またその解決に当たっておおいに力になったのは、久保副会長・和泉

理事・事務局の中村さんの存在であった。特に和泉さん中村さんは、その豊富な経験を生かして私に適切な助言をくださった。このお二人が居なければ今年の旅行はもっと散々なものになっていたに違いない。ここに団員の全ての皆さんに厚くお礼を申し上げる。

(4月10日)



4月1日
重慶市博物館にて



4月5日
武漢市内観光にて

~~~~~ 大好評 ! ~~~~

M同学のパズルで休息一下

中国語の発音にも、そろそろ慣れてきたことと思います。

の主あるみの發音で示した次のことばは、どれも日本人にもなじみのことばです。

まずは正しく発音して、意味を考えてください。

- A. jiǎozi (第三声+軽声の発声は?)
- B. chǎofàn
- C. lǎojiù (第三声+第三声→第二声+第三声)
- D. wǔlóngchá
- E. Wángfǔjīng (北京にある繁華街の地名です)
- F. Xiānggǎng (1997年に返還されました)

17

- D. 饺子 (ヂーイー) E. 王府井 (ウーハーイー) F. 香港 (ハーベイー)
- A. 饺子 (ヂーイー) B. 饺饭 (ヂーイー) C. 老酒 (ラーチュウ)